不思議な力、母のご飯

宮城県仙台市立五橋中学校

二年 雪谷 寧々

ああ、もう朝だ。昨夜もなかなか寝つけなかった。大きな試合の前はいつもこうだ。こうして弱い自分と何度向き合えばいいのか。台所では母が朝食の用意をしている。いつものみそ汁の香りが漂ってきた。不安な気持ちを抱えたまま、寝ぼけ眼をこすり、食卓につく。母の作った具だくさんのみそ汁を飲むとお腹の底からじわっと温かくなる。試合の日の朝、ご飯はいつも母が、

「粘り強くね！」
 と言って納豆を用意する。笑ってしまうのだが自分でも緊張がほぐれていくのが分かる。母のご飯は私の力の源だ。

でも、試合会場に着く頃にはまた緊張が高まってきて体がこわばってしまう。足ががくがくと震え、自分の体が自分のものでないように感じる。そんな時に不安な気持ちを少しでも鎮めるために、私は母の作ってくれたおにぎりをゆっくりとかみしめる。少し不格好な鮭おにぎり。でも、いつも変わらない優しい味が私に力を与えてくれるのだ。硬式テニスは、とても過酷なスポーツで、メンタルを維持することがとても難しい。コートの中に入り試合が始まればどんなに辛い試合展開になったとしても誰も助

けてくれない。もちろん、自分の思い通りに戦うことができないときもあるのだが、思い通りに戦うことができないときの方が多い。心が折れてしまいそうになることもしばしばだ。それでも、母の作ったおにぎりを食べていると自分は、一人で戦っているわけではないということを感じ意識させられる。戦う勇気と安心感、「よしっ」とコートに一步ふみだす原動力にもなっているのだ。

試合に勝って帰宅した日の母のご飯は、いつもよりもよりいっそうおいしく感じる。試合に勝つことができた喜びが弾ける。張りつめて疲れきった心が一気に緩む瞬間だ。その日一日で使い果たしたエネルギーが満タンになっていく。

負けて帰宅した日も母のご飯は、悔しくてぐちゃぐちゃになって自責の念にかられている心、疲れきった心を癒やしてくれる。試合に負けたときは、本当に本当に辛い。だけど、その心の傷も、母のご飯を食べるとゆっくりとゆっくりと回復していくのだ。明日からはまた、しっかりと前を向いてがんばっていきこう。そう思える力が、体中に漲っていくのだ。

すごいことに、私の母の手作りご飯は体にも力を与えてくれている。

母は他の家事をするときは大ざっぱなのだが、食事を作るときだけは、いつも手抜きをせず、丁寧に作ってくれる。母は耳にたこができるくらい、「ほこりで死ぬことはないけど、ご飯だけは毎日の積み重ねで、体を作っていくものだから、大切な。」と、言う。私は四兄妹だ。私と妹は硬式テニスをしていて、兄二人はサッカーをしている。私も妹も兄二人も体が強く、四人ともめったなことでは風邪はひかないし、大きな怪我をしたこともない。それは、母が毎日毎日家族六人分の食事を栄養バランスも考

えながら作ってくれる、愛情たっぷりのご飯のおかげだと思っている。

母の手作りのご飯はなぜこんなにも私に力を与えてくれているのだろうか。それは、そこに母との心の結びつきがあるからなのだと思う。いつも忙しい中、寝る間も惜しんで早起きして作ってくれるご飯。それはやはり、コンビニエンスストアやスーパーなどで買ったものでは決して代用することはできない。試合で緊張して、体が思うように動かなくなり、自分の思うような戦いができないときには、母の温かい思いがまつたご飯が何度も救ってくれた。いつも変わらない母の優しい愛が、私の心を支え、体を作っていく。何があっても再び顔を上げて、進ませることができる、不思議な力があるのだ。

私もいつか、こんなふうに誰かに力を与えていけるような人になりたい。私の将来の夢はスポーツドクターになること。今、私の周りにも、怪我をしてしまつて、苦しんでいる友達が何人もいる。スポーツドクターという職業は、そういつたがなばつていいる人たちを支えて、力を与えていけるような職業だと思ふ。本当の意味で誰かに力を与えるということ。それは、優しさを押しつけるのではなく、相手の気持ちややつて、人と人との心が通じ合ったときに初めて、できることなのだと思う。だから私は、患者さんの心に寄り添つて、支えていきたい。そして、いつか今母が私に与えてくれている魔法のような力で、たくさんの人を幸せにしていきたい。

作文を書くに当たって

このテーマを見たとき、最初に思い浮かんだのはテニスの試合です。孤独で苦しいとき、いつも力をくれたのは母のご飯。母のご飯に込められた心に触れたとき、勇気をもらい、前を向くことができました。「力」は、心がこもっていないければ人を動かすことはできません。私も心ある強い人になり、人に「力」を与えられるようになりたいです。